



事例②

「高知市コミュニティ計画について」

高知市市民協働部地域コミュニティ推進課 課長補佐
池上 哲夫 氏



皆さん、こんにちは。これから「高知市コミュニティ計画について」説明させていただきます。

1. はじめに～高知市について～

最初に高知市の概要について簡単に説明させていただきます。現在、人口は約34万人、高知県全体の人口の43%が高知市に集まっています。既に人口自然減が始まっており、今後がすごく心配なところではあります。

古くからの歴史のあるまちで、有名なところでは紀貫之の『土佐日記』にも記載されています。最近ではNHK大河ドラマ「功名が辻」で放送されましたように、関ヶ原の合戦以降は山内一豊が入国し、24万石の城下町として発展してきました。

そして、高知出身で一番有名な人物は、大河ドラマで話題になっている坂本龍馬です。「龍馬伝」のおかげで、高知には大変大勢の観光客が訪れています。この「龍馬伝」終了後どうしようかということで、「戦国BASARA」というゲームで人気の出ている長宗我部元親という武将をまた大河ドラマに取り上げてもらい、観光客を集めたいと、知事も市長も頑張っています。

市制が施行されたのは明治22年、平成10年には中核市へと移行しました。そして平成17年1月に隣接する鏡村と土佐山村の2村の合併、平成20年1月にはさらに隣接する春野町と合併しました。

2. コミュニティ計画とは

コミュニティ計画とは一体何なのかというと、高知市では「市全体を地域の視点で区分し、それぞれの居住地域（コミュニティ）で、そこに住む住民の参加と創造による住民自治を基本とし、相互理解と連帯の下、快適で安全な、心のふれあう地域社会の形成をめざし策定する計画」と位置付けています。すぐ

く簡単に言うと、地区ごとに、その地区の住民と行政が一緒になって、その地区の将来像を描いた計画と言えると思います。

高知市では昭和46年に下地地区が自治省のモデル地区の指定を受けたことで、コミュニティカルテの作成や準備委員会の検討などの取り組みが始まりましたが、昭和50年、51年の連年の台風災害で、これは100年に1度の台風が2年連続で来たという、とんでもないときでしたが、その影響もあり、コミュニティ計画の策定にまでは至りませんでした。

しかし、平成3年に策定された「高知市総合計画1990」において、コミュニティ計画が総合計画と相互補完する計画として位置付けられたことにより、行政内部でコミュニティ計画の策定に向けて準備が始まりました。

高知市では平成5年からコミュニティ計画の策定に具体的に着手し、これまでに28地区で計画の策定を行ってきました。地図の中で色の付いている地区がこれまでに策定された地区です。また、計画策定に当たっては、おおむね小学校区を基準とした範囲を策定範囲として定め、それぞれの地区で計画を策定してきました。この計画策定に当たっては、これまでに1,100人を超える市民の方が参加し、多くの貴重な意見や提案をいただいています。最も新しい取り組みとしては、平成20年度から中山間地域の鏡・土佐山地域で策定を進め、今年2月に完了しました。

(1)コミュニティ計画の経過

次にコミュニティ計画の取り組みの経過を大まかに説明します。平成3年3月に総合計画を補完するものと位置付けられた後、平成5年4月からコミュニティ計画の策定を効率的に行うために、行政の視点からとらえた整備目標や現状・課題を横断的にまとめたものとして地区整備計画を作成し、たたき台としました。そして庁内の若手職員を中心にまちづくりパートナーを公募し、11チーム、106人体制でそれぞれの地区の策定に加わってもらいました。その後、平成6年3月に地区カルテを作成しました。この地区カルテは「高知市のコミュニティ計画」という冊子の8ページにあります。そうした項目を地区ごとに行政の方で洗い出し、計画策定の客観的な材料としました。

その後、平成6年6月から12月までの間に21地区で、順次コミュニティ計画策定市民会議が結成され、平成9年3月に21地区でコミュニティ計画が策定さ

れました。その後、平成11年に、さらに4地区で策定されました。平成15年にはまちづくり条例が制定・施行され、コミュニティ計画の策定・推進が市の責務と明文化されました。そして、17年度に1地区で、22年2月に2地区でコミュニティ計画が策定されています。

(2)まちづくり条例における位置付け

15年4月に施行された、高知市市民と行政のパートナーシップのまちづくり条例の第15条に「市は、市民等とパートナーシップを築いて地域のまちづくりを進めるため、市民等の意見を反映してコミュニティ計画を策定・推進するものとする」と明文化されています。

(3)コミュニティ計画の策定までの流れ

次にコミュニティ計画策定までの流れについてですが、まず地域の住民で組織されたコミュニティ計画策定市民会議で計画案の検討を行います。そして、策定市民会議で考えていただいた計画案を高知市へ提案していただきます。その後、ご提言いただいた計画案を実現の可能性や優先順位、実施時期やほかの地区とのバランス、予算配分などの視点で市の内部で検討を重ね、最終的に行政計画であるコミュニティ計画が完成となります。

3. コミュニティ計画策定市民会議

そのコミュニティ計画策定市民会議ですが、対象地区に募集チラシを全戸配布し、参加を呼びかけます。この会議には、その地区の住民で希望する方はどなたでも入会できます。参加人数は地区によって25人程度から150人と異なりますが、話し合いは毎月1回程度開かれ、ワークショップやまちあるき、住民アンケートなど、いろいろな形で地域の住民の意見を出し合って、おおよそ1年から1年半かけて進められます。メンバーにはその地区の自治会や体育会、PTA、民生委員、消防団など、いろいろな人に集まっていただきます。ただし、話し合いはあくまでも対等な立場で、まちづくりについて話し合い、その内容をお互いに発表し合うことで共有していきます。

コミュニティ計画の行政内部での検討

市民会議で出されたさまざまな意見・事業は実現可能なのかどうか。その実施時期に応じて短期、中期、長期に分けられ、また、実施主体は行政が主体となるべきなのか、協働で行うべきなのか、住民が主体となって行った方がより効率的にできるのかを含めて、住民の皆さんでいったん整理・調整し、コミュニティ計画（案）として市長に直接提言していただきます。

そして、市長に直接提言されたコミュニティ計画（案）は、行政内部で事業ごとに各主管課による考え方や関係課長による四つの部会、その後、副部長による幹事会、部長と副市長による委員会など、段階を追って関係法令や予算、ほかの地域とのバランスなど、実現の可能性を含めて再度検討を行い、行政計画として最終的に策定します。

4. コミュニティ計画推進市民会議

コミュニティ計画の完成後、自ら参加し、検討した計画を自分たちの手でさらに実現に向けて取り組んでいきたいという声が住民の中から出てきて、住民が主体となってコミュニティ計画推進市民会議が結成されました。このコミュニティ計画推進市民会議は、計画策定が終わった28地区のうち20地区で活動しており、2地区で新たに設立の準備中です。この推進市民会議は通常、月1回程度の定例会を開催して、住民が主体となったまちづくり活動をいろいろ進めています。

(1)定例会の様子

推進市民会議の定例会は、地域の公民館や小学校の生涯学習室などを会場として、いろいろな施設を利用し、集まって話し合いを進めています。

(2)防災の取り組み

次に各地区でさまざまなまちづくり活動が推進されていますので、いくつか紹介させていただきます。まず防災の取り組みなのですが、コミュニティが主催となって、例えば防災講演会や防災フェアを開催したりしています。

(3)環境美化活動

また、環境美化の取り組みですが、多くの推進市民会議で取り組んでいます。例えば浦戸湾に面した小学校と一緒に、こういう具合に集めたごみは行政の方がバッカー車を用意し、収集して処理を行っています。

(4)花いっぱい活動（フラワーロードづくり）

まちを花でいっぱいにしようという、花いっぱい活動も盛んに行われています。花の苗や種は高知市から現物支給される支援制度もあります。

(5)祭りによるにぎわい

また、地域のにぎわいや交流を目的として、いろいろな祭りが各地区で開催されています。「よこせと海辺のにぎわい市」という行事は、平成14年度に推進市民会議や漁協、体育会、PTAなど、地域の人たちが実行委員会を立ち上げ、自分たちで始めました。毎年6,000人以上の参加者が集まり、わずか1日の催し物ですが、その地域のにぎわいと交流の場として大きな成果を上げています。

(6)史跡・歴史への取り組み

次に史跡・歴史への取り組みについてご紹介します。その地区の史跡マップなどを作成し、地域へ配布しています。また、マップを使ったまちあるきなどを計画し、次の世代の子どもたちへ伝承する取り組みも、その地区ごとに行ったりしています。

平成20年に浦戸地区という小さな漁港に近いまちで歴史展が開催されました。この浦戸地区は長宗我部時代の城下町だったこともあって、海運や漁業で栄えた地区です。戦災を免れたこともあり、結構古い家や蔵が残っています。それぞれの家の古い民具を持ち寄り、地域の歴史に目を向けようということで開催しました。開催期間は1週間だけでしたが、高知市全域から600名ぐらいの来場者がありました。普段は集会所として使っている畳のところに、そのまま机や展示パネルを持ち込んで、住民の皆さんが行ったものです。この歴史展は推進市民会議のメンバーが中心になって準備・設営などを行いました。古い写真を見ながら、このころはどうだった、こうだったと懐かしい話が次々と出てきて、お年寄りの方が大変喜んでいました。

今年1月には、その隣の長浜地区で歴史展が開催されました。浦戸の地区が歴史展を開催したところ、隣の長浜地区も負けれられないということで準備し、地元に残っているものを自分たちで住民の皆さんに声を掛けて集めて、展示会を開催しました。地元の小学校も、学校の先生が授業の一環という形で見学に来てくれ、大変熱心に説明を聞いてくれて、これも地域の方たちに大変喜んでいただきました。

そして、歴史展に合わせて、まちあるきも企画されました。長宗我部元親の銅像や八十八カ所の札所などを回るということで90名近い参加者に申し込みをいただき、半日かけて回りました。これはちょうどチリ地震の大津波の警報が出ているときで、この人たちに「警報が出ていますので、やめてください」とお願いしたのですが、「大丈夫」と言って、時間を少しだけ短くするというだけでやってしまいました。

(7)協働による公園づくり

次に協働による公園づくりの事例について、ご紹介したいと思います。写真に出ているのは高知市の布師田地区というところの小学校の跡地です。平成17年4月にコミュニティ計画がされ、倉庫や物置、廃材等を置いていたのですが、ここを子どもたちが安全に遊べる場所として整備・計画したいということがうたわれました。そして、18年度から3か年で補助金等を活用し、推進市民会議の方を中心に住民と行政が協働で整備することになりました。

例えば公園づくりに使用する間伐材の切り出しも、推進市民会議の住民の皆さんが自分たちで行いました。技術的には少し危険なところもありますので、指導される方に来ていただいて指導していただきながら、実際の作業は住民の方がしています。たくさんの方の地元の小学校の子どもたちも参加してくれて、一緒に作業を行っていました。

また、この材木を使ってツリーハウスを作りました。これも、技術的なことは専門家の方に指導していただきましたが、ほとんど住民の方たちが作業しています。

そして、これは平成20年1月のオープン記念式の様子です。この式典も住民の皆さんが自分たちでやるということで、あいにくの雨天でしたが、せっかく用意したということで、餅も雨の中で放って、地区のみんなまで完成を祝いました。

5. 実施状況

平成19年度には、コミュニティ計画が策定されてから10年以上経過した地区もあることから、地区ごとに実施状況を住民の方に報告しました。このように行政主導の計画だけではなく、市民の方々とともに地域の将来を考え、その実現に向け検討し、実践するコミュニティ計画は市民と行政のパートナーシップに基づき進められています。

6. 住民自治の理念

最後に、コミュニティ計画に関する取り組みを担当する自治活動課を創設したときの坂本市長が残された言葉を紹介させていただき、高知市における取り組みの紹介を終わらせていただきます。

「天から降ってきて俄かに与えられた橋ではなく、自分たちで苦勞して工夫して作った橋こそが私たちの橋であり、そうでなければ従来通り泳ぐか渡船で渡るがよい」。この坂本昭市長というのはお医者さんで、コミュニティカルテというのも、この方の発案で準備されたそうです。コミュニティ計画をはじめとする高知市の取り組みの根幹には、今もこういう住民自治の理念が息づいていると思います。

これで高知市のコミュニティ計画のご紹介を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。